

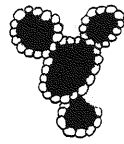
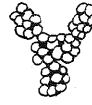
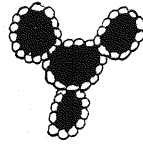
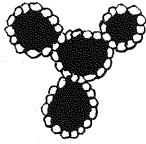
## 巻頭言

# 子どもの「時」

高橋 洋代

専攻科の学生たちは、現在、保育実習の真つ最中である。その実習ぶりを観察するために実習園を訪問するのだが、つい見入ってしまうのが、保育者や実習生の動きではなく、子どもたちの姿、表情である。零歳児、一歳児はよそ者の進入に不安げな眼差しを向け、目が合ってしまったりと、泣き声が部屋一杯にこだまする。しかし二歳児ともなると、「こんにちは！」と挨拶してくれたり、手に持ったなものかを見せてくれることもある。彼らはまだどこかに異星人的不可思議さを残しているものの、既に日本語の使い手であり、かつ社会的な人間になっている。

では、これらの幼い人たちは、何を感じ、何を考えながら彼らの「時」を過ごしているのだろうか？



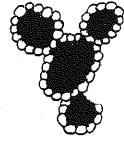
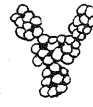
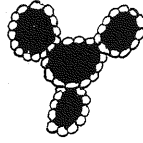
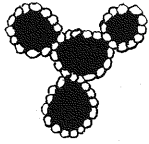
サンIIテグジュペリは『星の王子さま』のなかで、作者の分身ともいえる飛行士にこんなことを言わせている。

「ほんの子どもだったころ、ぼくは、ある古い家に住んでいたのですが、その家には、何か宝が埋められているという、いつたえがありました。……家じゅうが、その宝で、美しい魔法にかかっているようでした」。

さて、美しい魔法にかかっているのは「家」だろうか？ その家で暮らしていた子どもたちが、そのように感じていたことなのだから、魔法にかかっていたのは「その子どもたちの心」であるといえよう。サンIIテグジュペリにとつて、子どもの頃、感じ、考え、動き、身のなかに染み込んだ、さまざまな記憶は、彼の人生の原点となっている。彼が作品のなかで「目に見えないもの」について語るとき、しばしば、四歳から九歳までを過ごした「サン・モリス・ド・レマンズ」の館に還っていく。

私はこの春、その館を訪れる機会に恵まれた。門を入ると丁度、館との中間、庭の真ん中に、既に埋められてしまっている古井戸があった。石を積み上げて作られた古井戸の上には釣瓶は無くなっていたが、縁に木桶が置かれていた。前に見たことがあるような井戸……。

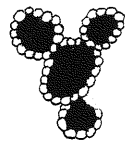
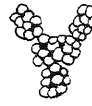
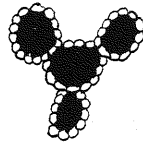
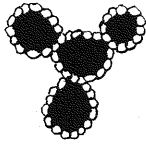
そう、それは王子さまと飛行士が砂漠の中に発見した井戸にそっくりだった。そうか、「砂漠で見つけた井戸」、「そこから汲み上げた水は心にも良いもの」、とは、聖書にある「サマリヤの井戸」を連想させるが、同時に、この館で過ごした幼い日々の特徴でもあったのか……。そうでなければ、彼がこの井戸の形を描く必要はないはずである。彼はその幼い日々



を、この館でどのように過ごしたのだろうか。「美しい魔法にかかったような」時間とはどのようなものだったのだろうか。どのような体験の中から彼の原点は生まれたのだろうか。

子ども時代の記憶は子どもの頃に過ごした日々のほんの一部に過ぎないが、はっきりと蘇ってくる場面がいくつかあり、サンIIテグジュベリならずとも、それが自分の生き方の根幹と通じ合うものがあることに気付くことがある。

五歳頃のことだったろうか。冬の寒い日の朝、外はまだ暗かった。「なつとう、なつとう」という少年の呼び声に、母は私にお金を握らせ、買ってくるようにと言った。縁側まで走り出て「なつとうやさん！」と呼ぶと、男の子が庭に走り込んできた。薄暗い電灯に照らし出された姿は、私より少し年上のように、垢だらけの細い素足がちびた下駄の上に乗っていた。足先が赤く腫れていた。しもやけ？ あかぎれ？ 痛そうだなあ。次の瞬間、私は家の中にとって返してタンスの引き出しから真新しい足袋を引っぱり出し、その子の所へ走って戻った。「あげる」。私はその時「この新しい足袋は私よりこの子のほうが履くにふさわしい」と思ったことをはっきりと憶えている。納豆を腕の中に抱えて母の所へ戻りながら、「きつとお母ちゃんは誉めてくれる」と確信していた。意気揚々と報告する私に、母はがっかりした様子で「あらー、新しいのあげちゃったの？ 古い方で良かったのに」と言った。終戦直後の物の無い時代に新しい足袋を手に入れるのは大変だったに違いない。やっと手に入れて、お正月に下ろしてあげようと、喜ぶ子どもの顔を楽しみに、タンスの中にしまっておいたも



のだったのだろう。普段私が履いていた足袋は継ぎのあたったものだったから。今思えば母の一言にも理由があったとは思うのだが、その時の私は母の言葉に心底がっかりしたのだ。それは母に誉められなかったからではなく、「新しい足袋を履くのは私よりあの子の方がふさわしい」という私の正しい（！）判断を大好きな母が理解しなかったことへの驚きと無念さだったのだ。

こういう判断を五歳の子どもが下したということは、考えてみれば不思議なことである。大好きな母親の判断のほうが間違っているという確信も、どうしてもつことができたのだろう。人は、生きていく上で本質的に大切なことを様々に感じ取る力を、幼くしてすでに与えられているのではないか。往々にして大人は、それに気付くことができず、子どもの声に耳を傾けることができない。子どもは、そういう大人に嫌われたくなくて、自然とわき上がる思いを押し殺し、押しつけられる「常識」や「規範」に自らをはめ込んでいくことがあるのではないだろうか。

子どもを見くびってかかってはならない。彼らの思いを大切にしなければならぬ。人は幼い頃に人生の羅針盤の方向を定めるのだから。子どもが自分の思いを正直に表現できるように、私たちは子どもと共にあるとき、常に謙遜でありたいと思う。

（立教女学院短期大学）